

十周年記念論文集の刊行にあたって

文学部長 石 原 武

創立十年を経て、私どもの文学部は自己変革の契機を迎えています。当初から、従来の伝統的な文学部の枠組みにとらわれずに、広範な視野で言語文化の教育・研究を進めてまいりました。その成果は世界の各地域で勇敢に道を開いている卒業生に見ることができますが、急激な変化の時代であって、これからどうするのか、私どもは今の教育の状況に安住してはおりられません。文学部という体制が、新たな時代に生きるのには、城を捨て、町に出て生まれ変わらなければならないという認識を、私どもはもっています。

旧来の文学部の呪縛を脱して、自由で闊達な教育・研究の現場をものにしたはずなのに、学問領域の自己中心主義、あるいは排他主義が、依然として学部を縛り、若い発想を萎えさせている現実はいとも残念です。私どもは学問領域の権威の解体から始めなければならないでしょう。過去、現在、未来の人間・言語・文化を省察する学問の土壌を豊かに、深く共有し、次代へ教育の展望を求めていく努力が、学部教員の共通の課題であると、私は考えます。

この記念論文集は、〈城から町へ〉の変革のプレリュウドとして位置づけられるでしょう。【論文】【翻訳】【研究ノート】【資料】【エッセイ】と「十年の総目次」など、学部の多様な位相が反映されています。この刊行を契機に私どもの文学部は次の変革の時代に入っていきましょう。